接続語の活用

ここでは接続語を効果的に活用して考えを膨らませ、論理の流れを作って意見文を完成させる方法を紹介しよう。

問題提起の文……筆者の意見に対する賛否等、自分の立場を明確に述べる。その際、人の意見に違和感や反発を感じるのであれば、その意見を一方的に否定するのではなく、共感できるのはどのような点で、違和感や反発を感じるのはどのような点かなどを、大まかに述べておくとよい。

まず、……賛否の根拠となる事例などを述べる。ここでは、根拠として最も分かりやすく重要なものを取り上げるとよい。また筆者の意見を否定するのであれば、その意見に欠けている点などを指摘することも必要である。

更に、……根拠となる事例を付け足したり、別の角度から根拠となる事例を紹介したりする。意見を述べるには、根拠となる事例が特殊だと説得力は生まれないので、事例はある程度多いほうがよい。また既に挙げた事例とは質のやや異なった事例を挙げることも意見の説得力を高める。

一方で、……自分の考え方とは違った考え方や見方を想定する。自分の考えがひとりよがりではなく、いろいろな角度から考えた結果であることを示すことは、その意見の説得力を高めるうえで効果的である。

しかし、……自分の考え方とは違った考え方や見方に対する反論と、その根拠などを述べる。

したがって、……以上をまとめて、自分の意見を述べる。ここでは、問題提起の文で述べた賛否をただ繰り返すだけでなく、簡単に自分の論を要約して結論を述べるほうが効果的な場合もある。

ここで用いられている「接続語」は一つの目安なので、課題などに応じて自分なりに工夫しよう。大切なことは、自分の意見の根拠となる事例を示すことと、自分とは違った考え方や見方に対して配慮をすることである。

自分の意見の根拠となる事例を示す
自分とは違った考え方や見方に対して配慮する

③ 意見文を完成させよう

▼文章化と推敲（すいこう）

文章の構成が決まったら、論理の筋道に注意して文章化してみよう。特に、接続語を工夫して、自分の意見を膨らませたり、それを分かりやすく配列したりして、説得力のある意見文を書いてみよう。

書いた文章は、誤字や脱字がないか、文や段落相互の関係が適切に理解できるかなどに注意して推敲しよう。そして文章ができあがったら、友達と読み合い、説得力のある文章になっているかどうか批評し合おう。

誤字や脱字がないか
文や段落相互の関係が適切に理解できるか

【反論を予想する】

第九単元「討論する」で、主張の仕方を考える時は、相手の反論を予想して、その答えを考えることも大切であることを学習した（P91）。これは、意見文を書く時にも有効である。

自分の意見に説得力を持たせるため、相手の反論を予想して、その反論に対する反論を考えて書くようにしよう。

学習活動④

接続語の使い方を工夫して、教材文に対する意見文を六〇〇～八〇〇字程度の分量で仕上げる。できあがった意見文はグループで回覧し、それぞれのよいところ、気になるところなどを批評し合う。

▼ 附録　常用漢字表（⬇P148）

11

小論文を書く

「考え方」を考える

課題1 ●意見文を書こう

この単元では、文章を読んで、筆者の主張に対する意見を書く技術について学習した。ここで学んだ方法を活用して、新聞の投書を読んで、その投書に対する意見を文章にまとめてみよう。

次の手順に従って、各自、意見文を書こう。

① 新聞の投書欄を読み、対象とする投書を一つ選ぶ。

② 投書に書かれている意見に対して、自分はどう考えるかを整理する。

・書き手の意見に共感するのか、違和感や反発を感じるのか。

・共感する根拠や違和感を感じる根拠を、自分の体験や知識の中から見つける。

・違和感を感じても、その根拠となるものが自分の体験や知識の中に見いだせない時は、論の展開の仕方や事例などに無理がないかを考えてみる。

③ 文章の構成を考え、接続語を効果的に使って、自分の意見を六〇〇～八〇〇字程度の分量で文章にまとめる。

・反論を予想し、それに対する反論も盛り込む。

課題2 ●意見発表会を開こう

意見文が書けたら、みんなの前で発表してみよう。意見文を書く時には、反論を予想したが、実際に、友達はどんな疑問や感想を持っただろうか。

次のような手順で、クラスの意見発表会を開こう。

① 書いた意見文を、グループ内で読み合い、よいところや疑問点、感想などを出し合う。

② グループ全員のものを読み終わったら、次の条件に照らして、それぞれどの意見文がよいかを話し合う。

(1)論じている事柄が明確か。

(2)具体例や情報は十分か。

(3)反論の予測と、それに対する反論は適切か。

(4)結論は明確で適切か。

③ グループの中から代表を選ぶ。

④ 各グループで選ばれた意見文を、クラス全体の前で発表し、感想を述べ合う。発表の際には、選ばれた理由も説明する。

意見文の一種に「小論文」がある。最近では、入学試験や企業の採用試験などに課されることが多い。「小論文」は、通常その場で書く。書く時に改めて調べることができないので、その時点での常識と教養で書き終えなければならない。問われていることは、その時点での自分の教養や思考力、個性のみならず、小論文から読み取れる潜在的な力量や可能性である。

「小論文」の種類には、大きく三つある。テーマを単語や短文などのかたちで与えられ、そのテーマについて自分の考えを書く「テーマ型」、課題の文章を読み、そこに述べられている事実や意見に対して自分の考えを書く「課題文型」、そして、統計的な資料を表やグラフのかたちで示され、そのデータを分析して自分の考えを書く「資料読解型」である。

この単元では、次の教材文を課題として、「課題文型の小論文を書く方法」について学ぶ。

●時分の花と非成熟社会

中村雄二郎

一九九八年（平成一〇年）の二月に、①白馬村など長野県の各地で行われた②冬季オリンピックでは、十代の高校生を含んだ日本の若い選手たちがスキー、スケートなどの競技の分野で予想以上の成績をあげた。その目覚ましい活躍は、このところ経済や政治そして社会の暗い話題ばかりが続き、すっかり憂鬱になっていた我々日本人に、久々に明るい話題を提供してくれた。スポーツだけに限らず、学問や芸術の分野においても、更には芸能の分野でも、若い才能や人材がのびのびと育っていくのは、国のためにも人類のためにも、文句なしにいいことである。

しかし、その前年の大晦日恒例の歌番組を見ていて多くの人が痛感しなかったであろうか。今の日本はあまりにも若者文化に迎合している、と。テレビのタレントや歌手として、若者たちがこんなにちやほやされたことは、これまでに果たしてあったであろうか。それにつけても、最近私が事あるごとに思い起こすのは、ずっと昔から能の世界を中心にして言われている「時分の花」というたいへん興味深い捉え方である。すなわち、能楽の大成者として知られる③世阿弥が、その能芸指南書④『風姿花伝』において述べた「時分の花」であり、これは、「まことの花」とはっきり区別して捉えられている。

世阿弥はこの書の初めのほうの「齢十二三より」のところで、次のように書いている。

この年ごろからは（謡も）ようやく音階に正しく合うようになり、能（の演技）についても分別もできてくるころなので、順序正しく物まねの数々を教えるがいい。それに、垂れ髪の稚児姿なので、何をしても美しいし、声もよく引き立つ。だから、悪い点は隠れて、よい点だけがいっそう引き立つだろう。一般的に言って、子どもの演能にはあまり細かい物まねなどはさせないほうがいい。そんなことをさせれば、当座の舞台にもしっくりしないし、将来も上達しないだろう。もっとも、（本人が）すでに上手になっていれば、何をしてもよろしい。つまり、美しい稚児姿で声も引き立ち、そのうえ、演技が優れていれば、どうして悪いことがあろうか。

と。しかし、彼は、続けて次のように述べている。

そうは言っても、この花は「まことの花」ではなくて、ただ単に「時分の花」つまり肉体的な好条件などで一時的に発現する魅力でしかない、云々。

ここに世阿弥によって言われていることは、十二、三歳という年齢といい、姿や声の若さの美しさといい、売り出した頃の現代のアイドルたち、若手タレントたちにぴったりした指摘ではないだろうか。では、世阿弥の言う「まことの花」とは、「時分の花」といったいどのように違うのであろうか。世阿弥は、前述の『風姿花伝』の終わり近くで、次のように述べている。

時分の花が含む声の美しさ、姿の美しさなどは、人の目を引くけれども、それはあくまで、肉体的な条件を基盤とする演技であって、自然の中で花が咲くのと同じことである。したがって、やがて散る時もあり、長続きがしない。ひとり「まことの花」だけは、咲くのも散るのも思いのままになる（自然を超えた真の芸になる）のである。

①白馬村　長野県北安曇郡白馬村。「長野オリンピック」で、スキーの滑降、ジャンプ、クロスカントリーなどの競技の会場となった。
②冬季オリンピック　「冬季オリンピック　長野大会」のこと。
③世阿弥　（一三六三？～一四四三？）室町時代前期の能役者、能作者。本名は元清。
④『風姿花伝』　世阿弥の代表的な著作。一四一八年頃までにまとめられたとされる。『花伝書』ともよばれる。全体は七編からなり、「花」はその中心的な理念。

と。

断っておくが、このように言ったからといって、なにも私は、若手タレントの特定の誰かを槍玉に挙げようとしているわけではない。私の言いたいのは、日本の社会全体があまりにも若者文化一辺倒になっていはしないか、ということである。そこには、豊かな自然環境と風土に恵まれた日本人が、歴史的にも、新鮮なるもの、旬のものを偏愛してきた、という事情もあるにはあるだろう。しかし、我が国では、学問や芸術を含むさまざまの領域で、若い時に一時目覚ましい才能を示した人たちが、その才能を十分に伸ばし成熟させることなく終わってしまう場合が、あまりにも多い。

社会的にも、文化的にも、日本人はどうして、成熟することができないのであろうか。そこには、いくつかの理由が考えられるだろう。まず、基本的に言って、明治以後の近代化および第二次世界大戦以後の復興・成長コースにおいて、何よりも産業と経済の振興を優先させ、徹底した能率主義をとったということがある。それが、とりわけ大きな理由として挙げられる。経済成長が最大の目標になっている限り、そのより高い量的な目標の達成が何よりも優先する絶対的な価値とされるのであり、そのためには、日常生活上のさまざまな余分な要素は切り捨てられてしまう。そして、このような①価値の単一化と能率主義と

が最も典型的に表れているのは、ほかならぬ②学歴偏重主義および偏差値の絶対視である。また、それに伴って起こっている大学以下の受験戦争である。

近年の日本において、高校生の大学への進学率は、③文部省の調査によると、一九八九年（平成元年）に、男子三五・八パーセント、女子三六・八パーセントという比率になって世界中を不思議がらせたが、それ以後、更に上昇を続け、一九九七年には実に、男子四五・八パーセント、女子四八・九パーセントにまで達している。私も、このすさまじい数字を知って驚き、改めてその過熱ぶりに考えさせられた。ところで、大学進学率が五〇パーセント弱、つまり、ほとんど二人に一人が大学卒ということになれば、人は大学を卒業しただけではとうていエリートにはなり得ない。当然そこに序列化が生まれ、自分が進学を希望する大学、誇りを持てる大学、高度の知的訓練を受けうる大学に行ける者たちは、高校生中でほんの一握りの者たちだけになってしまう。

あるいは人は、そんなことは誰も承知のうえであり、現在では、大多数の大学とは半ば遊びに行くところ、みんなが行くから行くところだと割り切っている、と言うかもしれない。また、それだけ大学が民主化され、大学の門が広くなったのだからいいではないか、とも言うかもしれない。けれども、ここで見落

とされてはならないのは、このように大学が大衆化される時、一見したところ価値の多元化が進むように見えて、実は、偏差値と能率主義という価値の単一化が進むこと、つまり、いっそう成熟社会が生まれにくくなる、ということである。各人が能率主義的に同じ単一価値を追求していくところに、どうして生活と文化の厚みを持った成熟社会がありうるだろうか。

それというのも、成熟社会とは、その成員たちが多元的な価値観のもとにさまざまな経験を通して、各人の生き甲斐を発見し、それぞれに自分の道を歩んで行くところにこそ成り立つからである。最初からただ単一の価値観にとらわれ、しかもその追求が能率主義によって行われるならば、人は年を取り、高齢になるにつれて、二つの意味で、何もすることがなくなってしまう。

一つには、後から来る若い精鋭によってたちまちその役が取って代わられてしまうからである。もう一つには、人生を通して次々に獲得されるべき新しい発見や経験の積み重ねが得られないことである。そのあげく、多くの人々は、もっぱら金銭欲や権力欲の亡者になり、あられもなく欲望を発揮するだけになってしまう。このように書いてみて、気がついたのだが、残念ながら、このような振る舞いはなんと、今日の日本の社会を堕落させ、荒廃させた多くの立身出世組の姿に似ていることだろうか。

私はなにも鬱憤ばらしのためにこんなことを言っているのではない。そうではなくて、日本の産業化と経済成長を推し進めた価値の単一化と能率主義が、このような問題につながることに世の人々の注意を喚起しておきたいのである。あの④バブル時代の最中に私は、さるドイツの企業人の言葉として次のような話を聞いてひどく考えさせられたことがある。「なぜ、あなたがた日本人は楽しみを明日に取っておかないのだろうか。ゆっくりと成長を楽しまないのだろうか」と。

いたずらにみんなといっしょに駆け出すのではなく、しばし立ち止まってその成長を減速させ、そうすることで一見無駄と思われることを抱え込みつつ、日々の生活を真に豊かにする道もあった。そのような真の贅沢を享受する道を何が阻んだのかを考えておきたかったのである。

最初に述べた長野オリンピックにおける若い選手たちの活躍

①**価値の単一化**　ある社会において、特定の価値のみが重視されること。
②**学歴偏重主義**　どの段階の学校まで行ったか、どの学校を出たかということだけで、人の価値を決めるような考え方。
③**文部省**　現在の文部科学省。
④**バブル時代**　一九八〇年代中頃、土地や株価の高騰を背景に日本経済が空前の好況にあった時代のこと。土地価格の暴騰のみを支えとした実体のない経済が、泡（バブル）にたとえられた。

は確かに壮挙であった。そして競技における単一価値と能率主義の場合には、その目標達成のためにどうしても、自分との厳しい闘いが強いられる。だからそこでの単一価値には、おのずと複雑な側面が含まれることになり、能率主義も厳しい自己鍛錬の場になる。運動競技の場合には、そういう違いがあることも見落とされてはならないだろう。

中村雄二郎

一九二五年（大正14）――

東京都に生まれた。哲学者。主な著書に、『現代情念論』『臨床の知とは何か』『術語集』Ⅰ・Ⅱ、『悪の哲学ノート』などがある。本文は『正念場』（一九九九年刊）による。

小論文を書く技術を学ぼう

大きなテーマについて考える／広い視野に立って論じる

▼広い視野に立つことが求められる小論文

前ページまでの教材文を課題として与えられ、それについて小論文を書くよう求められた場合には、どのようにしたらよいだろうか。

小論文を書くことは、基本的には意見文を書くことと同じである。ただし、小論文では、一般的に大きなテーマについて考えたり、広い視野に立って論じたりすることが求められるので、日常的な体験だけをもとにしたのでは、意見を述べることが難しい場合もある。

教材文では、「価値の単一化」と「能率主義」、「成熟社会」など現代日本の抱える大きな問題が扱われており、社会や文化に関する広い知識を持っていることが望ましい。だが、次のような観点を参考に文章を批判的に検討することで、自分の考えを広げたり深めたりすることもできる。

▼文章を批判的に検討するための観点

○筆者の現状認識を検討する。どのような意見も、ある現状認識のうえに立って述べられている。したがってその現状認識が妥当かどうかは、その意見を理解するためにも、あるいはそれを否定するためにも、前提となる重要な観点といえる。例えば教材文では、筆者は今の「日本の社会全体があまりにも若者文化一辺倒になっていはしないか」（P110）と憂えている

▼附録　小論文を書く手順（⬇後見返し）

学習活動 1

教材文について、意見文の学習で学んだことを踏まえて筆者の意見を把握し、それに対する自分の考えを書き出す。

学習活動 2

本文を参考にして、次の手順で教材文の検討をし、自分の考えを深める。

① 筆者の現状認識を検討する。
② 主なキーワードについて検討する。
③ 引用されている言葉について検討する。
④ 筆者の理想（主張）について検討する。

▼練習　マップ法を使って考えてみよう（⬇P116）

▼附録　マップ法を使う（⬇P133）

限られた事例から現状を特徴付けていないか
自分はどう思うか

キーワードの検討は、筆者の主張の妥当性に迫る

が、それが本当かどうか考えてみる必要がある。筆者は限られた事例から現状を特徴付けていないか。若者である自分はそういう認識をどう思うか。また「若者文化」の対概念として「老人文化」などが想定されるが、それはどういうものか。今の日本にそれは本当にないのか。ないとすれば、それはどうしてか。もちろん、筆者の現状認識に共感するのであれば、筆者の挙げた事例以外にどんな裏付けの事例があるかを考える。

○キーワードについて検討する。キーワードには筆者の考え方が集約的に表れていることが多い。キーワードの語義や使われ方などを検討することは、筆者の主張の妥当性に迫る重要な観点である。教材文でいえば、キーワードは「価値の単一化」や「能率主義」などである。そこでそれらの語義をよく考え、それらが本当に従来の日本の社会や文化に当てはまるのか、検討してみる。もし当てはまると思うなら、日本ではどうしてそういう価値観が根強いのか、それらに利点はなかったのか、などと考えてみる。

○引用されている言葉を検討する。評論などでは、しばしば権威のある人物の言葉などが引用され、それが筆者の主張のよりどころとされたり、論の説得性を高めようとするために使われたりする。これは書き手からすればとても効果的な手法といえるが、もともと文脈の異なる中で述べられた言葉であるため、筆者の主張とは合致しない場合もありうる。そこで引用されている言葉について、その使われ方が適切であるかどうか検討してみ

引用されている言葉を筆者の主張に関係付けることは妥当か

筆者の理想は真に理想といえるのか
筆者の理想は実現可能なのか

る必要が生じる。教材文で引用されているのは世阿弥の『風姿花伝』の一節である。これは一種の芸術論であるが、それを「現代のアイドル」や「成熟社会」という社会の在り方に関係付けることは妥当かどうか検討してみる。また、教材文の主張に関わる考え方が今までに読んだ本などになかったか思い出し、関連付けてみる。

○筆者の理想を検討する。筆者がある意見を述べる以上、そこには現状認識のうえに立った、ある理想的な状況が思い描かれているのが普通である。したがってそれが真に理想的な状況かどうか、またそれが実現可能かどうかを検討することは、筆者の主張の妥当性を考えるうえで欠かせない観点といえよう。この文章の筆者は「一見無駄と思われることを抱え込みつつ、日々の生活を真に豊かにする道」（P111）を理想的な社会の在り方とし、それを「成熟社会」とよんでいる。そういう社会を自分はどう思うか。よいと考えるなら、そのよさを別の角度から論じ、そうでないなら、その根拠と、自分がよいと思う社会の在り方などを論じる。

以上のように与えられた文章を検討することは、批判することが目的ではなく、そうすることで自分の考えを広げたり深めたりすることが目的である。与えられた文章について、疑問点やそれに対する考えが浮かんできたら、それらをメモしておこう。メモがたまってきたら、それらを分類するなどして整理し、接続語を活用して文章化してみよう。

学習活動 3

教材文に対する自分の考えを、八〇〇～一二〇〇字程度の小論文にまとめる。

▼附録　常用漢字表（⬇P148）

課題 小論文を書こう

ここで学習した方法で、一〇八～一一二ページの教材文「時分の花と非成熟社会」を課題として小論文を書こう。

次の手順に従って、各自、小論文を書こう。

① 教材文「時分の花と非成熟社会」を読み、筆者の意見を把握して、それに対する自分の考えを書き出す。

② 次の手順で教材文について具体的に検討し、自分の考えを深める。

(1)筆者の現状認識を検討する。

(2)主なキーワードについて検討する。

(3)引用されている言葉について検討する。

(4)筆者の理想（主張）について検討する。

③ 検討したことを踏まえて、自分の考えをまとめる。

④ 「序論・本論・結論」のかたちで、八〇〇～一二〇〇字程度の小論文にまとめる。

※自分の考えを書き出す時や、考えを整理したりまとめたりする時は、マップ法を活用するとよい。

練習 ◆マップ法を使って考えてみよう

マップ法とは、自分の考えを文章にまとめる際に、メモを作りながら考えを整理していく方法である。言葉を書き出したメモが地図（マップ）に似ていることから、そうよばれている。附録一三三ページ「マップ法を使う」に示されている図を見ながら、次の手順で、マップ法の使い方を練習してみよう。

▼附録 マップ法を使う（⬇P133）

① 課題とすべきキーワードを一つ決める。

② A4程度の紙の真ん中にキーワードを書き、丸で囲む。

③ その丸から放射状に六本の線を引き、次の六項目を当てる。

a そのキーワードと対比される物事は何か。

b そのキーワードと類似している物事は何か。

c そのキーワードの定義・起源は何か。

d そのキーワードの影響・経過は何か。

e そのキーワードに関わる体験は何か。

f そのキーワードに関わる別の情報はないか。

④ この六項目に該当すること、感想や意見、連想することなどを書いていく。

⑤ ④の作業を繰り返し、それに同感したり反論したりしながら自分の主張を作っていく。